

発表題目：

技術に媒介される移民の身体実践をめぐる人類学的試論

——ソーシャルメディアを介した東京都の中国出身若者の日常実践から

所属：東京大学大学院総合文化研究科

氏名：閻美輪

1200字程度で発表内容を記載してください。

移民研究におけるデジタル実践の議論は、この十数年で大きく広がってきた。第一に、Levitt (2001) や Glick Schiller et al. (1992) 以降のトランスナショナリズム研究は、移民が国境を越えて社会的ネットワークを維持し、文化的混成や多層的アイデンティティを形成する過程を明らかにしてきた。しかしその前提は「越境するつながり」にあり、移民の身体感覚や日常実践に技術がいかに作用するかは十分に問われてこなかった。第二に、Miller らのデジタル人類学や Madianou の「ポリメディア」論(2012)は、複数メディアの選択と使い分けが移民の関係性や感情をいかに編成するかを示した。しかしその焦点は関係性の構築に置かれ、特定の技術環境が身体習慣や知覚にまで影響を及ぼす過程は手薄である。第三に、Parreñas (2001) や Castañeda (2010) らの身体研究は、労働・ケア・ジェンダーの場面における移民の身体的脆弱性や差別経験を明らかにしてきたが、身体を主に「さらされる」対象として描き、日常の技術環境に媒介されて生成される身体の能動性を十分に捉えてはいない。

本発表は、こうした先行研究の限界を乗り越えるために、「技術に媒介される移民の身体」という視角を提起する。ここでいう身体とは、ソーシャルメディアのアルゴリズムやインターフェース、さらには言語的・文化的に特異な情報環境に触発され、経験や欲望を方向づけられながら日常実践を編成し続けるトランスナショナルな交差点である。

具体的には、2020年から2023年にかけて東京都内で行った参与観察と聞き取り調査の民族誌データを分析する。第一の事例は、中国料理店の定点観察である。当初偶然に提供された地方料理が中国語圏のソーシャルメディアである Red (小紅書) 上の投稿を契機に「温州レストラン」へと転換し、味覚や身体感覚に基づく「本物性」の評価や「中国人に友好的な店」といった経験の共有が、移民独自の知と身体習慣を形成する様子を描く。第二の事例は、Red に継続的に投稿する温州出身インフルエンサーの日常に密着し、投稿のために生活実践が再編成され、さらに「広告収入」というインセンティブが身体の使い方や時間感覚を変化させていく過程を明らかにする。

これらの事例から浮かび上るのは、Red が単なる情報共有の場ではなく、身体感覚、味覚、リズムといった日常的次元に介入し、移民のハビトゥスを再編成するプラットフォームであるという点である。本発表は、ブルデュー (1977) のいう「社会条件に基づき身体に沈殿した傾向性」としてのハビトゥスを踏まえつつ、これを「技術環境に媒介された身体習慣」として再解釈する。Red のようなソーシャルメディアは、単なる情報媒体ではなく、アルゴリズムや投稿インセンティブを通じて移民の日常リズムや感覚を組み替える社会的条件として機能している。従来のハビトゥス論が文化や階層に重きを置いてきたのに対し、本研究は技術を媒介にした身体の形成に焦点を当てることで、移民研究における日常実践論を拡張する。